

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.124
2014.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 — 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第11回

阿玉台式土器の細分(5)

〈阿玉台Ⅳ式土器〉

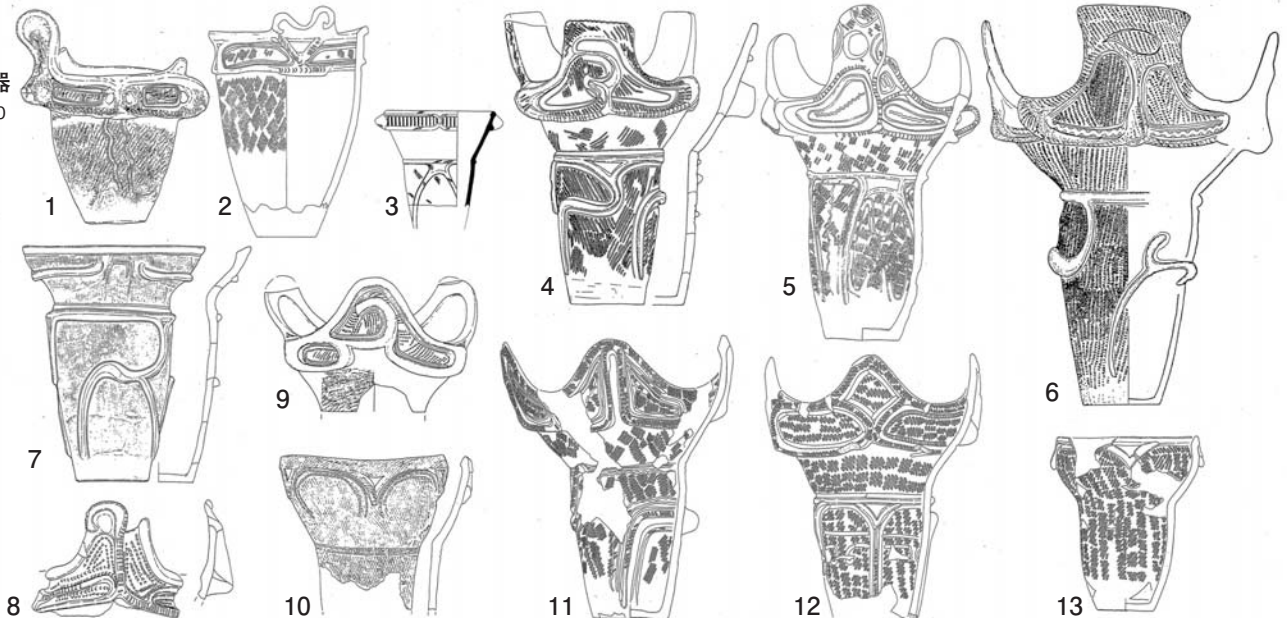
阿玉台Ⅳ式は隆帯に沿って沈線文を施す。五領ケ台式末以降続いてきた工具を押引きする手法はここで途絶える。但し、並行する勝坂式末の粗大な三角押文(第7図8)や大木式の有節沈線(第7図10)を受容するものもあり、一部に押引きによる文様も残る。施文域の3帯区分、逆U字状(第7図3・5)や直線的懸垂文(第7図12)、平縁と波状縁の併用、V字状突起(第7図13)など、阿玉台Ⅲ式以降の伝統を踏襲する。阿玉台Ⅲ式に始まったクランク状の懸垂文(第7図4・6・7・11)や口頸部に横位のS字文を配した土器(第7図7)も引き継がれる。隆帯は阿玉台Ⅲ式より太く粗大化する例が多い。直線的に立ち上がる胴部から、60°に近い角度で頸部が開き、口縁部下端が鰹を張つ

たように突出する、阿玉台Ⅲ式期に多いプローションは、引き続き存在する(第7図4～6・11・12)。一方で、直線的な短い胴部に、直接分厚い隆帯による区画文を配す詰まりな器形(第7図1・2)が目立つようになる。波状口縁の波頂部は平坦なもの(第7図4・7)と尖るもの(第7図11・12)がある。円環状もしくは中央を窪めた円盤状の突起を付けるもの(第7図5)もある。波状口縁そのものが低く、頂部にかけて全体が丸味をもつものもある(第7図9)。縄文施文は阿玉台Ⅲ式よりも増え、大半の土器が縄文を施文するようになる。並行する大木式同様、縦方向に間隔を開けて施文するものもみられる。大木式が2段LR優勢であるのに対し、阿玉台式は2段RLが優勢であり、大木式の縄文施文をそのまま受容してはいないこと

を、堀越正行が指摘している(堀越2008)。

西村正衛による利根川下流域の貝塚の発掘調査では、阿玉台Ⅲ・Ⅳ式との層位的関係はとらえられなかった(西村1972)。阿玉台Ⅳ式土器は、阿玉台Ⅲ式と共伴する例が多く、その年代的な独立を疑問視する意見があるが、茨城県東大橋原遺跡B-6号、E-8・9号土壇出土土器は阿玉台Ⅳ式のみで構成される。他にも異系統の土器を含むものの、栃木県松の木遺跡A40土坑、槻沢遺跡14H-P2では出土する阿玉台式は全てⅣ式である。霞ヶ浦北岸以外では、異系統の土器と共存する。中峠式の交互刺突文を取り入れたキメラ土器も存在する(第7図6)。なお、阿玉台Ⅳ式系統の土器が加曽利EⅠ式期になっても存続することを江原英が指摘している(江原2006)。

第7図
阿玉台
Ⅳ式土器
縮尺: 1/10



1・7・10. 栃木県御霊前遺跡 2・5. 栃木県槻沢遺跡 3. 茨城県村田貝塚 4. 栃木県御城田遺跡 6. 栃木県添野遺跡 8. 栃木県竹下遺跡 9. 東京都恋ヶ窪遺跡 11～13. 茨城県宮後遺跡

〔参考文献〕

江原英、2006、『阿玉台式の伝統と「中峠0地点型」の成立(覚書)―寺野東遺跡と島田遺跡出土土器の観察から―』『栃木県考古学会誌』第27集、栃木県考古学会
西村正衛、1972、『阿玉台式土器編年研究の概要―利根川下流域を中心として―』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科
堀越正行、2008、『千葉の貝塚に学ぶ』

〔出典〕

1・7・10. 栃木県教育委員会、2000、『御霊前遺跡Ⅰ』
3. 西村正衛、1984、『石器時代における利根川下流域の研究』
6. 市貝町教育委員会、1974、『添野遺跡の研究』
9. 国分寺市教育委員会、1979、『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』
2・5. 栃木県教育委員会、1980、『槻沢遺跡』
4. 栃木県教育委員会、1987、『御城田遺跡』
8. 宇都宮市教育委員会、1989、『竹下遺跡Ⅱ』
11～13. 茨城県教育委員会、2001、『宮後遺跡Ⅰ』

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器 阿玉台式土器の細分(5) 塚本師也 …1
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第13回) 渡辺 誠 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第117回) 小松 学 …3
■考古学者の書棚 『図録・石器入門事典(先土器)』 脇 幸生 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第13回)

渡辺 誠

14. 角田文衛先生の幅広い人脈

奉職した平安博物館は、考古学協会が運営するものであるが、ここは厚い熱意をもって角田先生が設立した学術的組織である。いつも言われていたことであるが、学問には目的学と手段学がある。考古学とか文献史学というのは後者である。しかし自分の目指すものは古代の研究であり、古代の考古学とか文献史学といったバラバラのことではない、両者や他のものも含め、幅広く総合的に研究する必要がある、その実践として大阪市立大学助教授時代の昭和26年に古代学協会を設立し、後に昭和42年に京都に平安博物館を設立された。

この古代学の構想を深めるため、ご自身の努力に加え、多くの先生方との親交を深められた。もちろん私にはその全貌を知る由もないが、私にとって強く記憶に残っているのは、建築史の福山敏男先生、地理学の藤岡謙二郎先生、神話学の松前 健先生、それに関西大学の横田健一先生、大谷大学の五来 重先生、瓦の神様と呼ばれた木村捷三郎先生、文献史学の黒坂伸夫先生と奥様の永井路子先生、池田源太先生等々である。

とりわけ今でも、奥様からお聞きした松前 健先生のお仕事の仕方は、私の場合に大きく影響を残している。松前先生は講義や講演の場合、その前にすべて原稿を書いているということであった。もちろんパソコン以前である、また五来学長との関係で、大谷大学へ上野佳也先生が出講していたが、東大へ戻られた時に私が引き継いだ。しかし正規の学生ではなく、もぐりの他大学の学生の方が熱心であったのがおかしかった。

五来先生は修験道の研究でも有名な方であった。角田先生との懇談で陪席させて頂いた時、修験者こそもっとも縄文の伝統を伝えているのかも知れないと言われたことは耳に残っている。

また平安博物館によく立ち寄って下さった岡崎 敬先生も忘れられない。先生は母校京都大学の人文科学研究所の帰りに寄られたのであるが、すぐ北側の御池通りに関西空港へ行くバスの停留所があったことが便利であったためである。生態学の梅棹忠夫先生に紹介して下さったのも岡崎先生である。目立ったらしく、角田先生がどういう関係かと聞かれたことがあった。当時テレビのシルクロードの御指導で、東洋史

出身の私にはまぶしくそのお話を伺ったものである。恩師の松本信広先生と親しくしておられたこともあって、目をかけて下さったようである。

帝塚山大学の堅田 直先生も石付喜三男氏との関係で学生時代から存じ上げていたが、平安博物館奉職後間もないころに、主催される帝塚山大学考古学談話会で話す機会を作って下さり、いろいろな方にご紹介くださって、早く関西になじむように気を使って下さった。

15. 江谷 寛先生とのこと

上記の先生方以上に関係が深くなり、かつ親切にして下さったのは、当時高校教諭であった江谷先生である。運転が好きで上手であるばかりでなく、定時制のため昼間はあちこちこまめに調査に出かけていた。そして私も時間の制約がないため、できるだけ一緒にすることになっていた。特に関西の遺跡を知らないばかりか、一般的な地理感もない私には、大変ありがたいことであった。関西ばかりでなく、遠方にも連れて行って頂いた。東は東京・長野、西は徳島・鳥取までである。とりわけ鳥取では亀井照人先生とお引き合わせて下さり、後に縄文後期の鳥取布瀬・桂見遺跡といった低湿地遺跡の調査に加わることができた。また旧福部村では、谷岡陽一氏とともに同様に後期の栗谷遺跡を発掘した。ドングリ類を含む貯蔵穴群と、木製の杓子なども発掘し、縄文時代の食文化の研究を一段と推し進めることができた。カゴ類の出土した布瀬遺跡なども同様に大きな示唆を与えてくれることになった。

後に名古屋大学に移ってからも、イタリアのポンペイ遺跡の発掘調査に誘って下さり、その折にアマルフィのアジアから伝わった紙工場の見学に連れて行ってもらい、大きな恩恵を受けたことは、すでに記したとおりである。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト ⑪

矢口遺跡 ～ 長野県塩尻市

小松 学

長野県の中央に広がる松本平の東南部に位置する東山山麓は、縄文中期の環状集落として知られている俎原遺跡

をはじめとして、縄文時代を中心とした数多くの遺跡が分布する遺跡の密集地である。今回紹介する矢口遺跡もこの

山麓域に立地している。

私と矢口遺跡との出会いはだいが前に遡る。今はもう過去の産物になってしまった感がある、いわゆる「考古少年」であった私は、小学生の頃半日くらい時間が取れば自転車に乗って仲間たちと遺跡にでかけ、夢中で土器や石器を探していた。その時、この矢口遺跡にも表採に訪れたことがある。

小学5年生のある日、習っていた剣道の先生から「あそこに行けば土器や石器が拾えるぞ」と言われ、心躍らせながら矢口遺跡にでかけていったことがあった。遺跡周辺は山林の中の狭い畑と牧草地になっていた。その時何時間か表採したが、わずかな黒曜石片と土器片があっただけで、めばしいものは見つからなかった。それ以降、あまり魅力を感じない矢口遺跡に再び足を運ぶことはなかった。

その後1984(昭和59)年、私が高校1年生の時に、東山山麓地区農道整備事業に伴う発掘調査が矢口遺跡(当時は山ノ神遺跡と呼ばれていた)で行われることになり、作業員として数日間調査に参加した。その間遺構検出のため一日中ジョレンで土を削ったが、ほとんどと言っていいくらい何も出ない調査で、いい思い出はなく、発掘調査でもこんなこともあるんだと思い知らされた。

なお、この時の調査は、820㎡の範囲で行われたが、土坑41、集石1、溝状遺構1、ロームマウンド10が検出されたに過ぎず、出土遺物も少なかった。唯一の救いは伏襲を伴う縄文中期末の土壌墓が見つかったことである。

時は流れ、大学で考古学を学んだ私は、塩尻市役所に就職し、農林課で道路建設や下水道整備といった考古学とはまるで正反対の職務を経験した後平出博物館に配属となった。

1993(平成5)年、博物館勤務となり最初に調査を担当することになった遺跡がこの矢口遺跡であった。長野県総合教育センター建設に伴う発掘調査で、調査面積は6,000㎡という比較的大きな調査であった。

本格的な発掘調査に入る前に現地を訪れ、十数年振りに畑を歩いてみると、やはり僅かな土器と黒曜石片が拾えるくら

いであった。心の中で「やっぱりだめか…」とつぶやいた記憶がある。

発掘調査は6月から8月にかけて実施された。過去の調査では縄文中期末の土壌墓が見つかったことから、今回の調査でも中期の土壌墓の続きでも見つければと考えつつ調査を開始した。調査を進めていくと予想とは異なり、縄文中期ではなく縄文前期初頭を中心とした遺物が出土するようになり、それまでの認識を新たにすることになった。

傾斜地でさらに大小の礫が混じるといって、決して掘り易いとはいえない状況であったため遺構検出作業には苦勞したが、次第に住居跡とともに多くの土坑があることが明らかになってきた。最終的には、前期初頭を主体とした住居跡が中央広場を囲むように16軒検出され、松本平はもとより全国的にみても環状集落の初現的な様相を示す遺跡として、全国紙の1面にも取り上げられた。

調査の概要として、まず検出された住居跡をみると、住居形態は不整形円形や不整形方形といった定形的ではないものが大半であり、柱穴の規模や配置に統一性はみられなかった。炉については7軒で確認されたが、すべて地床炉であった。

土坑も143を数え、大きく二郡に分かれていることが確認された。一群は住居と同じ時期のもので、集落の中央広場を中心に住居周辺に分布するもので、検出された土坑の多くが該当する。もう一群は、1984年の調査で発見された土壌墓と同じ縄文中期後葉から後期前葉の土坑で、位置的にも以前調査された土壌墓の周囲にあたっている。しかしこれらの土坑を調査した結果、副葬品を伴う明確な土壌墓と考えられるものはこの調査で確認することはできなかった。

出土遺物としては、1991(平成3)年に長野県北佐久郡御代田町の塚田遺跡や下弥堂遺跡の発掘調査で出土し話題となっていた縄文前期初頭の縄文系尖底土器の一群と同様な土器が矢口遺跡からもまとまって出土し注目された。折しもそれらの土器を下平博行氏らが「塚田式」として提唱しようとしていた時期に重なったこともあり、さらに注目されることとなった。

このように、矢口遺跡の調査では集落のみならず遺物の面でも想像を遙かに超えた大きな成果をあげることができた。あの遺跡がまさかこんな遺跡になろうとは。まさに遺跡は掘ってみなければ分からないということを痛感させられた遺跡であった。

しかし、このように貴重な成果を残した一方で、報告書を改めて見直すと、あまりに不十分な内容で情けなくなってしまう。初めて編集を行ったという経験不足、報告書を年度内に刊行しなくてはならないという時間的制約などなど言い訳はいくつも思い浮かぶが、とにかくこの遺跡を生かすためにも再報告をしなくてはならないという思いを強くした。

これから先もまだまだ矢口遺跡との付き合いは続きそうである。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは竹原 学さんです。



▲矢口遺跡全景

考古学者の書棚

「図録・石器入門事典〈先土器〉」

加藤晋平・鶴丸俊明／柏書房（1994）

脇 幸生

今回、紹介する本は、柏書房刊行の『図録・石器入門辞典〈先土器〉』です。石器を勉強する（している）人のなかで読んで当然？というくらい著名な本なので、紹介すること自体がそもそも間違っていると考えましたが、我が家の書棚にあったので、紹介します。

本書の構成は、以下の通りです。

序—石器とは

- I 石器のある場所
- II 石器の発掘と整理
- III 石器の分類の方法と製作工程
- IV 石器の種類
- V いろいろな石器
- VI 石器の原材
- VII 石器の分類と観察
- VIII 石器の記録と計測
- IX 石器の作り方
- X 石器のはたらき
- XI 石器の研究と自然科学
- XII 時代区分と編年
- XIII 東アジアの旧石器文化と日本の先土器文化

この本の特徴は、書名に「図録」とあるように、全体を通して実測図または写真が多いことである。通常であれば、図は文章を補完するものとして用いられているが、本書は文章が図を補完しているような印象を受ける。私自身、誰かに石器を教えてもらったわけではない。本書を読んで分かるようになったのだから、考古学を学んでない一般の人でも容易に読めると感じる。

私が特に見ている箇所はⅢ・Ⅳ、Ⅷである。Ⅲでは、石器から情報を得るため分類作業の重要性を説く中で、石器の割れ方、技法、加工（調整）の分類を紹介している。整理作業で、石器の整理に携わったことが人に説明するときこの箇所を資料として渡している。調整の名称がシンプルなので、どのような加工（調整）が行われているかが、イメージしやすい。また石器に至るまでの製作工程を示した図は、複雑な工程を経た石器の説明の際には好評である。

Ⅳでは、石器個々の分類基準を明確に述べる。説明している石器は模式図で示され、必ず文章の横にある。調整が似ている場合には、その差異も述べており、混乱することはまずない。石器になじみのない人でも、視覚的に石器の違いが判断できるだろう。経験者にとっては、器種分類で時々迷うことがあるかもしれない。その際に、分類基準の整理を行



う意味で、本章を見ではどうだろうか。簡単であるが「なるほど」と思うようなことが見えてくるかもしれない。

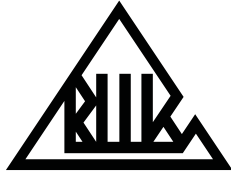
Ⅷは、実測について述べている。仕事柄、石器を書いたことがない人たちに教える際には、これを用いているし、これを見て覚えるように勧めている。近年石器の実測について市販されている書籍をちらほら見かける。見るという書きすぎている感があり、なかなか好きになれる。しかし、これは簡単であり、かつ執筆者の感想や、注意する箇所が述べられているので、必要なポイントが良く分かるだろう。

本書は、学部生時に購入した書籍である。土器研究をしたいと思って入学したが、その土器が理解できず、石器に研究対象を変える時に講師の方に「非常に分かりやすい。」と勧められ、すぐさま生協に走った記憶がある。その後、執筆者の加藤晋平先生が通っていた大学の教授であることを知り、友人とサインを頂きに研究室まで行ったことを覚えている。

私に石器を教えてくれた本書は、まさにバイブルである。判断に迷う時があれば、まず先に本書を開く。書いてあることは、いつ見ても同じだが、新鮮さはいつまでも変わらない。

アルカ通信 No.124

発行日 2014年1月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所 (株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.123

2013.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

34

「何処でもと言ったら木曽義仲の里日義小中学校に(S36～40・1961～65)」

売木も5年たったので校長に何処でも良いから転任をと話したら、木曽の日義小中学校に決まった。平谷峠・治部坂峠・寒原峠・清内路峠を越えて木曽に入る。木曽川に沿って遡ること1時間、漸く旧中山道宮越宿の日義村に着く。はじめ空の狭い木曽谷に憂鬱だった。だが中央線が走り宮越駅があったのが嬉しかった。当時は蒸気機関車が走っていて松本に出かけて、樋口昇一さんを訪ね泊り込んで考古学について存分に話したり、本屋に寄るのが楽しみだった。

宿直室床の間に縄文中期勝坂式土器片が木箱に入って積まれていた。数年前に上の原遺跡を発掘したが文化財保護法違反でうやむやに終わったという。住居址があったというが記録は無い。夢中になって接合したら完形土器が幾つも出来た。下伊那では中々手にすることのない勝坂式土器。木曽教育会総会で木曽にはじめてきた教師で発表をと言われ、上の原遺跡出土の縄文中期の見事な土器を見て作り上げた縄文人の生活と感性の豊かさを『縄文中期土器から』を発表した。

クラブ活動に郷土班をつくった。男子生徒の何人かは考古学が好きで家近くの畑から遺物を採集してきた。私の関心が生徒に移ったのか嬉しい遺物をもたらされた。小沢原遺跡からは弥生前期遠賀川式土器片が、これは最高に嬉しかった。『考古学手帖』に報告した。稲荷沢遺跡からは押型文土器立野式土器片が、下伊那だけでなく木曽にも分布することを知った。二本木遺跡からは平出3類A式土器が、早速発掘すると中期初頭住居址と立野式土器が纏まって出土した。平出3類Aについては木曽の資料を纏めて発表した。二本木遺跡の押型文土器に

ついては長野県考古学会で報告した。学校北側の道路に水道工事の溝が掘られ、そこから縄文中期唐草文土器が出たと持ってきた。見に行くと断面に幾つもの竪穴住居址落ち込みがあった。土器の出た一軒を発掘する。これがお玉の森遺跡に関わる最初でした。校舎北に校庭を造成することになり幾つかトレンチを入れて平安時代住居址を確認し発掘する。放課後郷土班の中学生や社会科授業実習だといって生徒と共に調査し、時には自習させて私一人で苦労するが、平安時代の住居址群で広い校庭を全掘出来ず残念だった。木曽駒高原にゴルフ場が作られることになって分布調査をする。多くの遺跡を確認するが、まだ原因者負担のルールが出来ていない時なので部分的にピットを入れるだけで終わったのが残念であった。同様なことは国道19号のバイパスが山麓の遺跡地帯を通ることになったが全く調査することなく工事が始まった。20を越える遺跡が無残に破壊されてしまった。

夏休みに開田高原の柳又遺跡の発掘に参加した。樋口さんは大学時代からの友人。夜枕を並べて語り明かした。初対面は森嶋稔さんとデブ同士と意気投合し、亡くなるまでずっと親しく交流した。青沼博之君は木曽西校出身で気さくな人柄で私の家にも気楽に出入りする仲となった。他にも木曽教育会郷土館委員の先生や木曽西校地歴部の生徒も親しくなり、木曽での仲間ができ共に幾つもの遺跡を調査するようになった。

下伊那から声が掛かり飯田市座光寺原遺跡では弥生後期の住居址を調査し、出土土器から座光寺原式を設定した。高森町増野新切遺跡は縄文中期後半の住居址で土偶の出土が目玉された。9年後に再発掘し大きな成果を得た。上伊那からは藤沢宗平先生に誘われて箕輪村萱野高原の萱野遺跡の調査に参加し、縄文早期押型文土器細久保式の好資料に当たった。県教育委員会主体の開発地域埋蔵文化財分布調査では松本諏訪地区新産地区内調査で塩尻市高出IV地区を担当した。縄文早期押型文土器樋沢式土器の石組炉と土器石器の好資料を得て、私の押型文土器への研究意欲を高まらせた。



▲中学生とお玉の森遺跡発掘



▲小馬背遺跡で青沼君と(右)

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

目次

■田舎考古学人回想誌 何処でもと言ったら木曽義仲の里日義小中学校に 神村 透 …1
 ■考古学の履歴書 公務員としての考古学研究者(第13回) 石井則孝 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第116回) 小林康男 …3
 ■考古学者の書棚 「人と動物の人類学」 阿部友寿 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第13回)

石井 則孝

《わが友・わが趣味 ―その2―》

はじめに

今回は、早稲田大学の考古学関係者、日本考古学協会の関係者、奈文研での仲間さらに現在良く会っている若い考古学関係者について書かせてもらったが、今回は、10年前に立ち上げた日本遺跡学会の面々と大学院時代の芸術学の同窓について記してみたい。

1. 日本遺跡学会の立ち上げ

日本遺跡学会は、2003年2月に設立した。この話のもととは、遺跡は考古学の専門家によって発掘され、その成果についても発掘者によって発表されるのが通例である。ところが、掘った遺跡が歴史上重要な遺構でありかつ後世に残し伝える必要性のあるものについては、単に埋め戻して保存するというのではなく、近年は、保存と活用の面から、掘った当事者よりも、それを活用する人々の方に重点が置かれ、掘った当事者に関係なく、史跡になったり公園になったり、時代の要請によって保存活用方法に大きな変化が生じてきている。「掘った人間に関係なく、遺跡の顕彰も出来ない」こんな話が坪井清足大親分から私のところまで伝わって来、「遺跡をもつと顕彰せねばならない必要がある」との観点から、昭和39年(2002)に入所した高島忠平、町田 章、松下正司、佐藤興治、猪熊兼勝などが集まり、「遺跡顕彰学会」を作ったと話がまとまった。そこで坪井さんは、「顕彰するほど我々は、個々の遺跡について知っているのか、遺跡の研究がほんとうに進んでいるのか等々の大きな問題があり、顕彰することは大事だが、遺跡そのものをもっと研究することが一番重要」であることに結論を得て、「遺跡学会」という名称に落ち着いた。

そこで遺跡が保存されたあと、その整備や活用方法について、最っとも見識のある奈文研の文化遺産部 景観研究室にしばらくの間事務局を置いてもらうことになった。そこで初代会長に牛川喜幸さんに就任してもらい、私は2代目の会長として、初期段階の足固めを行ってきた。現在は、奈文研前所長であった田辺征夫さんが務めている。

2. 日本遺跡学会の運営委員

坪井清足先生を顧問に据え、全国規模で研究を展開していく必要性から、運営委員には北海道から九州まで、全国規模で人材を求めている。北海道から畑 宏明さん、東北から進藤秋輝・田中哲雄さん、関東から沢田正昭・菊池誠一・西田健彦さんと私、関西から高瀬要一・岡村勝行・田辺征夫・増淵 徹・真鍋建男・和田晴吾さん、山陰から黒崎 直・吉岡泰英さん、九州から磯村幸男・高島忠平さんである。会計監査に、富成哲也・山口 博さん、幹事に奈文研から栗野 隆・内田和伸・恵谷浩子・加藤真二・平澤 毅・小野健吉諸兄になっていただき大変お世話になっている。選挙管理委員に京都の杉原和雄さん、文化庁の中島晴さんが担当している。このメンバーで併任の方もいるが、研究誌・大会誌の発行を行い毎年6月末に全体の運営委員会を開催している。昨年(2012)は、学会創立して10年目の節目の年になっていたもので、11月24～25日にわたって、設立の地奈良を

記念し「大和の世界遺産と遺跡」をテーマとして、平城京跡資料館講堂において総・大会を開催した。

3. 大会の内容

特別講演として、国土館大学の岡田保良氏による「世界遺産と遺跡」と題して、世界遺産条約の枠組みや、登録のプロセス、日本の世界遺産、今後の登録に向けての取り組みなど、世界遺産からみた日本の遺跡について論じていただいた。さらに薬師寺の山田法胤氏による「世界文化遺産である薬師寺について」の題のもと、伽藍全体の取り組みについて論じていただいた。

報告では、奈良県地域振興部文化・教育課の森本 理氏による「奈良県の世界文化遺産全体について」の概略と課題を示していただいた。次に法隆寺の大野玄妙氏に「日本で最初に世界文化遺産に登録された法隆寺における登録の経緯と保護の歴史・現在の取り組み」についてを論じていただいた。続いて奈良市文化財課の山口 勇氏から、1998年に登録された「古都奈良の文化財」について、周辺環境を含めた保全活動と整備・活用事業についての報告をいただいた。続いて大峯山竹林院の福井良盟氏から、2004年に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」について、経緯と登録に至るまでの活動・問題点及び登録の効果などを論じていただいた。最後に森本氏と同課の山田隆文氏に、現在登録に向けて取り組んでいる「飛鳥・藤原の宮都とその関連資料群」についての報告があった。

これらの報告については、「遺跡学研究」第10号 2013年発行に詳細に記録してあるので関係者は是非読んでいただきたい。

以上記してきたように、日本遺跡学会は、日本列島全体に常に目を向けて研究活動を行っているので、運営委員の間とは、北海道や九州でも行動することが多く、本年は、10月4日(土)・5日(日)に函館で大会を開いた。130名を超える市民参加もあり、2日目には、バス3台を連ねて、青森県と函館市が手を組んで行っている世界文化遺産登録へ向けての「北海道・北東北の縄文遺跡群」の北海道に所在する遺跡群の見学会を行った。函館市教委の阿部千春さんはじめ多くの研究者・関係者にお世話になった。

4. 早稲田大学大学院芸術学専攻学科

前にも記したように、早稲田に考古学専科の大学院は無く、私は唐招提寺鑑真大和上の研究者の第一人者として知られる安藤更生先生の下に入院した。大学一年生の時から指導を

受けていたので、何んとか入院を許されたのだろうと推測している。先輩として佐藤・坂井の二人が入院を許されていたが、あくまでも私の推測であるが、滝口 宏先生と安藤先生が會津

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

ハ一先生の門下生であるところから、約束ごととして、一人なら入院を許そうという話になっていたものと考えている。それは、その後も、考古学の専攻生を毎年一人ずつ入院が許されてきた歴史がある。芸術学専攻には、絵かき、写真屋、

ガラス屋、俳優、東洋美術史、西洋美術史、日本美術史と各方面の才覚ある面々が居た。毎週木曜日が會津記念館にある研究室が全員集合の研究日であった。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 116

平出遺跡 ～ 長野県塩尻市～

小林 康男

本欄への執筆依頼を受けた時、いくつかの遺跡が頭にうかんだが、やはり「平出遺跡」を紹介することにした。平出遺跡とのつきあいはもう半世紀を越えている。小学生の頃からしばしば平出遺跡を訪れ、畑の中にある復元住居や平出の泉の近くに建つ平出遺跡考古博物館の展示物を飽くことなく見入ったことを思い出す。その後、縁あって平出博物館に勤務することになり、平出遺跡の保護や整備、博物館の活動に携わり、現在もその仕事を続けている。

平出遺跡は、長野県塩尻市にあり、JR塩尻駅からおよそ1kmの至近の場所にありながらも周囲はブドウ園が取り巻き、秋ともなればその甘い香りに満たされる、そんな場所に遺跡はある。1793年(天明3)、ここで石鏃を拾い記録に残したのは菅江真澄、もう230年も前のこと。それからのはるか後の1932年(昭和7)に部分的に発掘調査が行われているが、「古代集落遺跡の総合調査」をテーマとして本格的に発掘調査の手がはいるのは戦後まもない1950年(昭和25)になってからである。

大場磐雄を中心とした調査団は、地域の人々の協力を得ながらこの遺跡が平出の泉から流れ出た渋川に沿って東西1km、南北300mにわたる広大な範囲に広がる縄文から平安時代にかけての大集落遺跡であることを明らかにした。この調査は、考古学ばかりでなく建築・古生物・地学・民俗・歴史など多分野の研究者が平出遺跡・平出地区を総合的に研究しようとした総合学術調査で、その後の考古学的調査方法の指標ともなったと評価されている。1951年(昭和26)には史跡指定地の一角に藤島亥治郎の手によって第3号住居が古代の農民の竪穴住居としては全国で初めて復元され、その姿は「伏蘆の曲蘆の内に 直土に藁解き敷きて」と山上憶良が詠う貧窮問答歌の世界を髣髴させるものとして話題となった。

こうして1952年(昭和27)にはおよそ15haが国史跡となった。

史跡指定から40年、この広大な史跡指定地の保護・活用



縄文の村

のための事業が1997年(平成9)からようやく動きはじめた。土地を買上げ、平出遺跡公園として整備する事業のテーマは「五千年におよぶ平出の地」。史跡指定地の中央区域のおよそ6haを整備対象とし、整備委員会(委員長戸沢充則)の指導を得つつ、「縄文の村」「古代の農村(古墳・平安時代地区)」の景観復元をおこない、縄文時代から現代までの時間の流れを実感できる場の創出を目指すことになった。

整備に先立って実施された発掘調査では、およそ1haが調査対象となり、昭和20年代からの調査面積を加えると史跡指定地の13%が発掘されたことになる。既掘の成果も含めると発見された竪穴住居跡は、縄文中期116、後期2、古墳81、平安51、古墳から平安33の283軒、古墳・平安の掘立柱建物址は7棟に達している。今回の調査では、今までまったく予想もしていなかった縄文時代中期の双環状集落の存在という新知見をもたらし、古墳時代では大型竪穴住居と掘立柱建物を含む遺構群が遺跡の東西に分布することを明らかにし、なぜか火災に遭った住居が異常に多いことにも関心が寄せられた。平安時代では従来から言われていた全期間存続していたとの考えかたに修正を迫る10世紀後半から約100年間の短期間だけ集落が営まれたことを明らかにした。

整備では、この発掘調査の結果を基にして縄文・古墳・平安の各時代の集落復元が進められた。「縄文の村」では、中期新道期の集落を7棟の竪穴住居・2基の立石・広場によって表現し、その隣接地には廃棄竪穴住居への縄文土器大量投棄の状態をレプリカ展示している。「古代の農村」は、6世紀から7世紀の古墳時代と11世紀前半の平安時代を整備対象とし、時代の異なった古代の農村の姿を見ることができる。古墳時代では有力者の住まいを大型竪穴住居と高床倉庫で、一般農民の住まいを中型の竪穴住居を復元することで示し、周囲にはオハツモモの果樹園・畑地を配している。平安時代では、4棟の



古代の農村 古墳時代地区

竪穴住居と1棟の納屋が「ニワ」と称される広場を囲むように復元され、当時の「一戸」の集落景観を再現している。

遺跡公園脇に建てられたガイダンス棟の2階にあがると、背後に横たわる比叡ノ山・大洞山を借景とし、また周囲をブドウ園や畑地が取り巻くすばらしい自然環境のなかで、木々や草々の緑に染まる縄文・古墳・平安の各時代の佇まいが一望できる。

背後の山々、畑地、そして復元された家々に目をとめれば当時の人々の暮らしぶりをおぼろげながら想い描くことができる。縄文人や古代の人々が見たと同じ風景を現在の私たちもそのままながめることができる、これが平出遺跡の何よりのすばらしさである。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは小松 学さんです。

考古学者の書棚

「シリーズ来たるべき人類学⑤ 人と動物の人類学」

奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋 編／春風社(2012)

阿部 友寿

目次

第Ⅰ部 行為主体性

1. 動物と話す人々(山口未花子)
2. 告げ口をするブタオザルー ボルネオ島プナンにおける動物アニミズム(奥野克巳)

第Ⅱ部 分離不可能性

3. 西欧におけるハイブリッドとしての怪物ー人間と動物を構成要素とするその身体と役割をめぐって(松平俊久)
4. 「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」ーアフリカ熱帯林における人間=動物関係と人間集団間関係の交錯と混淆(大石高典)
5. 生きているマンダラー ヴァジュラ・ヨーギニーとサンクの生態宇宙論(石倉敏明)

第Ⅲ部 境界性

6. 隠岐島のばけ蛇ーまたは森羅万象に口を割らせること(近藤祉秋)
7. 野生動物とのつきあい方ー生物多様性保全におけるツキノワグマとジュゴンの位相(池田光穂)

第Ⅳ部 越境性

8. 共存を可能にする(境界)の再生産ーマサイ社会におけるライオン狩猟とゾウの追い払い(目黒紀夫)
9. 隔離された越境性の再検討ーエチオピアの獣害対策におけるローカルな境界認識を手がかりにして(西崎伸子)
10. 動物にひそむ贈与ー人と動物の社会性と狩猟の存在論(ポール・ナダスディ)

本書のキーワードは、動物と人との二元論もしくは動物対人の二項対立、その境界性である。我われは、あたりまえのこととして、人と動物とを分離させ、対立するものと考えてはいないだろうか。そして、動物と人との二元論もしくは二項対立を日本列島にかつて存在した狩猟採集民にもあてはめてはいないだろうか。たとえば、縄文時代の人びとも、人と獲物は対立した存在であったと。しかし、本書を見るかぎり、人と動物の分離や対立はどの社会にも共通する普遍的な特徴ではない。動物と人は、その特徴を共有し、ときに入れかわり、さまざまな場面で動物と人の境界が曖昧になることがある。

本書のすべてを紹介することはできないので、私の関心にそってその一部を上げる。

「動物と話す人々」のなかで、山口未花子は、カナダの狩猟採集民カス力が動物を人と同じように会話すると見ているという。動物は人と会話することも可能で、その動物との交

渉成立が狩猟の成功に結びつく。彼らにとって動物との交渉は、現実直面する死活問題であってけっして空想の絵空事ではない。

「告げ口をするブタオザル」では、奥野克巳が、ボルネオ島狩猟採集民プナン社会における、人の粗野な振る舞いについてカミに告げ口する動物をあげる。プナンがそのように動物を思い描く。このとき、実際にカミに告げ口するのかどうかを問うても始まらない。なぜなら、動物を人のようにあつかうことが擬人法だとか比喩表現だとかいう説明にとどまらざるをえないからだ。彼らは単に動物を人に喩えているわけではない。その変換の裏に彼らにとっての動物と人との距離感を読みとらねばならない。

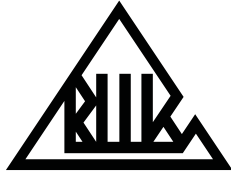
「第Ⅱ部 分離不可能性」では、動物と人が入れかわり人と動物が分離されない事例が紹介される。たとえば、『「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」の民族誌』で、大石高典は、中部アフリカの狩猟採集民バカと農耕民バクウィレをあげる。彼らは、お互いに相手の人々をゴリラや小動物である「ゴリラ人間」と考え、ゴリラの中にも魂は人間という「人間ゴリラ」がいるとも考える。このなかで、狩猟採集民であるバカは、農耕民バクウィレに比べ、動物と人という二項対立や二元論を避ける傾向があるとの興味深い指摘がなされる。

人間と動物の二元論や二項対立的思考は、欧米の人びとにとって抜け出し難い思考のようである。「動物にひそむ贈与」のなかでポール・ナダスディは告白する。「互酬性は社会的行為であるため、人間同士、つまり、交換過程に活動的かつ意識的に参加する社会的存在の間でのみ起こりえる」と欧米の研究者は考える。そのため「欧米の人類学者は一人と動物の関係に関する先住民の考えかたに明るい者たちでさえもー動物、ましてや、感覚をもった霊的に強力な動物も含むように社会という分析概念を拡張することにためらいがちであった」というのである(p308)。

人と動物の対立的思考に対する疑問、広義の人にとっての二項対立的思考を対象化するには、ヒュー・プロディ(池 央耿訳) 2004『エデンの彼方ー狩猟採集民・農耕民・人類の歴史』草思社もあわせて参照いただきたい。

アルカ通信 No.123

発行日 2013年12月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL: <http://www.aruka.co.jp>



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.122
2013.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 -

塚本師也

第10回

阿玉台式土器の細分(4)

〈阿玉台Ⅲ式土器〉

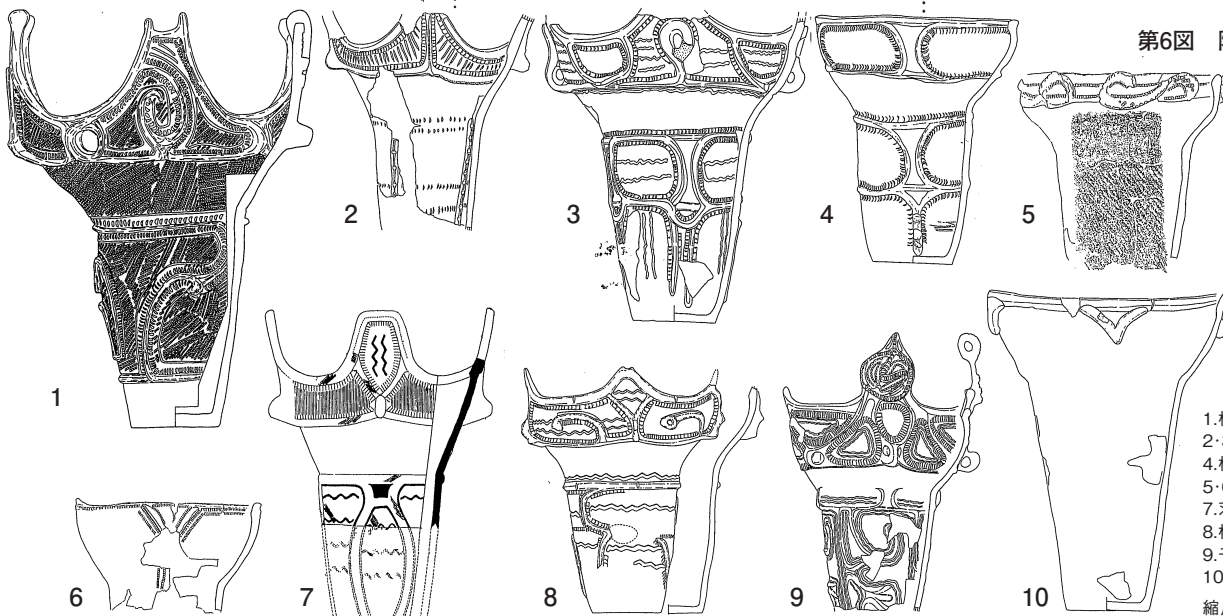
阿玉台Ⅲ式は隆帯に沿って幅広の爪形文を施す。阿玉台Ⅱ式の複列の角押文には、半截竹管の内側を器面に当てて押し引きするものがあるが、阿玉台Ⅲ式では竹管の背側を押し引きする。ほかに篋状工具も使う。中部・西関東地方の勝坂式土器は、新道式段階以降、盛んに所謂爪形文を用いるが、これを阿玉台式が受容したと思われる。大村裕は、阿玉台式土器の爪形文が押し引きによって施文するのにに対し、勝坂式土器では、工具を器面に連続押捺するとし、これを「キャピラー文」として区別した(大村1984)。

口縁部区画文、頸部素文帯、体部懸垂文の3帯構成、逆U字状(第6図7)や直線の(第6図2)な懸垂文、V字状突起(第6図6・10)、押し引き手法、平縁と波状縁を持つ

ことなど、Ib式以来の阿玉台式土器の伝統を受け継いでいる。しかし、阿玉台Ib～Ⅱ式土器にみられた多くの文様表出が消滅する。弧が向きを変えて縦に連なる懸垂文が新たに出現する(第6図1)。頸部素文帯に波状沈線を施すことは稀となる。隆帯の接点に円環状の突起が付くことがある(第6図8)。爪形文に併走する波状沈線(第6図9)や懸垂文下端を横位隆帯で区画する手法(第6図1)は、勝坂式文様構成、施文技法を受容・変容させたものと思われる。隆帯は太くなり、断面はカマボコ状を呈す。縄文の採用は、阿玉台Ib～Ⅱ式土器と異なる大きな特徴である。またこの時期に、大木式のS字状隆帯を取り入れ、口縁部の施文域に配した土器(第6図5)も出現する。

西村正衛は、阿玉台Ⅲ式は層位的に阿玉台Ⅱ式やⅣ式と明確に区別できないが、上

層にいたってⅡ式より量的に増大するという傾向を指摘した(西村1972)。その後、阿玉台Ⅲ式のみで構成される良好な一括資料の発見が相繼ぎ、阿玉台Ⅲ式が年代的に独立することは検証された。阿玉台Ⅲ式の細別であるが、阿玉台Ⅱ式と伴出する古い段階の資料として千葉県大柏遺跡SI-087・090、阿玉台Ⅲ式のみを単独で出土する新しい段階の一括資料として茨城県大谷津A遺跡第65号住居跡、千葉県大柏遺跡SI-085等がある。阿玉台Ⅱ式と伴う古い段階の阿玉台Ⅲ式土器には、体部中位に幅広い区画を1～2帯を配すものが目立つ(第6図3・4)。新しい段階の阿玉台Ⅲ式土器は、隆帯と爪形文が粗大化し、頂部が平坦もしくは丸味を帯びる大波状口縁の深鉢が目立つ(第6図1・7)。そして、この段階に地文の縄文を採用する(第6図1・5)。



第6図 阿玉台Ⅲ式土器

1. 栃木県湯坂遺跡
 - 2・3. 茨城県宮後遺跡
 4. 栃木県槻沢遺跡
 - 5・6. 茨城県大谷津A遺跡
 7. 茨城県村田貝塚
 8. 栃木県文谷地内
 9. 千葉県大松遺跡
 10. 茨城県堂平遺跡
- 縮尺: 1/10

【参考文献】

大村裕、1984、「所謂「角押文」と「キャピラー文」の違い」『下総考古学』7、下総考古学研究会
西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

【出典】

1. 大田原市教育委員会、1979、「湯坂遺跡」
- 2・3. 茨城県教育委員会、2002、「宮後遺跡1」
4. 西那須野町教育委員会、1980、「槻沢(つきのきざわ)遺跡」
- 5・6. 茨城県教育委員会、1985、「大谷津A遺跡」
7. 西村正衛、1981、「茨城県江戸崎町村田貝塚(第一次調査)—東部関東における縄文中・後期研究—その五」『早稲田大学教育学部学術研究』30号
8. 塚本師也、1984、「栃木県芳賀郡市貝町文谷出土の阿玉台式土器」『栃木県考古学会誌』第8集、栃木県考古学会
9. 千葉県教育振興財団、2011、「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡—縄文時代以降編1」
10. 茨城県教育委員会、2004、「堂平遺跡」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- 阿玉台式土器 阿玉台式土器の細分(4) 塚本師也 …1
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第12回) 渡辺 誠 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第115回) 長屋幸二 …2
■考古学者の書棚『鎮めとまじないの考古学(下)』 高橋 香 …3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第12回)

渡辺 誠

13. 桑飼下遺跡で学ぶ

先生方・諸先輩からの恩恵ばかりでなく、考古学者としては遺跡の発掘から教えられることも多い。私にとって、先に記した川崎市初山遺跡や舞鶴市桑飼下遺跡は、その代表的な遺跡であり、思い出深い遺跡である。

桑飼下遺跡の重要性は、次の3点に集約される。第一は低地の自然堤防という立地条件であり、第二は植物遺体の豊富な泥炭層遺跡であること、第三は多量の打製石斧の出土により、縄文農耕論に大きな影響を与えたことである。これらを順不同で記す。

当時の縄文農耕論は、二つあった。藤森栄一先生による中部日本の中期農耕論と、賀川光夫先生による九州の晩期農耕論であるが、ともに農具とみなされた打製石斧が大きな比重を占めていた。これらは別々のテーマであると考えられていたし、今でもそう考えている人もいる。そしてお二人の先生には親しく御指導頂きながら、桑飼下遺跡と私の出した結論は否定的なものであった。

この遺跡は、両農耕論の舞台の中間の近畿地方に位置するばかりでなく、時期的にも縄文後期であり、その中間の時期に位置している。すなわちこのことによって、打製石斧は東から西へ伝わったことが明らかになったのであり、大陸から九州に伝わったのではなく、まして東日本への伝播は考えられないことになった。しかし藤森先生が中期農耕論を提唱した背景には、前期と中期の文化的落差があったのであり、農耕論の可否のみを論じることは、縄文研究にとって非生産的である。そして私なりの研究は、本遺跡の植物遺体の研究から導き出されている。

植物遺体の宝庫でもある本遺跡の泥炭層は、先にも記したように心無い学生達によって踏み荒らされていたが、これらはすべて平安博物館へトラックで運び、徹底的に水洗選別を行った。もちろん多かったのは殻の堅いトチやドングリ類であり、しかも並行して行った花粉分析ではトチは検出されず、遠隔地まで採集に行っていたことが明らかになった。ということは、同時に難しいアク抜き技術も獲得されていたことを明示している。

そして必然的に、堅果類のアク抜き技術についての民俗学的調査が重要視されてくることになった。民俗学的調査につ

いては後で詳しく記すが、植物遺体は京都大学理学部の池田次郎先生の下にいた西田正規氏に調査して頂いた。福井県の鳥浜貝塚の調査にも関係していて、貝塚や泥炭層遺跡についても心無い学生たちとは雲泥の差の深い理解をもっておられた。理学部には亀井節夫先生がおられ、前任地の新潟大学・信州大学におられた時に、江坂先生の使い走りでお目にかかったことを覚えておいて下さり、君も京都に来たのかと優しくして頂いたのはありがたいことであつた。

植物遺体自体の研究は、その後『古文化財科学会・考古学と自然科学』のなかの「生活と文化」の班に加えて頂き、大坂市立大学の粉川昭平先生に多くのことを教えて頂いた。そして縄文時代の食文化の研究へと展開したのである。

この班には奈良教育大学の嶋倉已三郎先生もおられ、材の周定ではいろいろと教えて頂き、両先生や花粉分析担当の高知大学の中村 純先生とともに、佐賀県唐津市菜畑の調査に訪れ、その帰りに奥様方のお土産を置き忘れ、発車間際の電車にお届けしたのも、今では懐かしい思い出である。

それまでの縄文時代の食文化の研究といえば、貝塚の魚介類や骨類からのみ論じられ、極端な場合動物食の時代とされ、弥生時代の植物食時代とはギャップがあり、一段程度が劣るとさえ言う人もいた。しかしトチやドングリ類などの植物遺体の研究が進んだ結果、野生のものか、栽培されたものかの違いはあるものの、一貫して植物が主であるとみられるようになってきた。この意味で研究室のテーマである『日本文化の源流』にかなったものであった。

そしてトチやドングリ類などのアク抜きなどは、当時急速に展開した照葉樹林文化論のなかで、野生植物の高度利用段階と位置付けられ、藤森先生の意図はこのことによって達成されたと考えられる。当時闘病中だった先生がお元気であれば、さぞお喜びになったことと思う。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 115

日野遺跡・寺田遺跡 ～ 岐阜県岐阜市

長屋 幸二

岐阜市日野遺跡・寺田遺跡は旧石器時代を主とする遺跡です。濃尾平野の北端、四方を標高200m～300mほどの山に囲まれた盆地状の平地にあります。どちらの遺跡も沖積

地の中に島状に残った低位段丘面に乗っており、埋没谷を挟んで200mほど離れています。大きな声を出せば声の届く距離です。

昭和60年度(1985)、61年度(1986)には岐阜市教育委員会によって発掘調査が行われ、寺田遺跡では81基の礫群と66か所の遺物集中部、日野遺跡では63基の礫群と19か所の遺物集中部が設定され(吉田1987)、東海西部地域を代表する旧石器時代遺跡の一つとなっています。

発掘調査が行われたのは、ちょうど私が大学に入学した年でした。高校生のころから同級生に連れられて、その近隣で資料の地表面採集を行っていた私は、ぜひこの発掘調査に参加したいと思っていました。夏休みに帰郷すると、真っ先に自転車をとばして発掘現場へ行き、道場破りのように「発掘調査に参加させてください」と申し出ました。大学に入って3ヵ月、ほぼ初めての現場。やる気にはあふれていましたが、現場の右も左もわかりません。調査を担当された吉田英敏先生には何度も怒鳴られながら、休みのたびに現場・整理作業に参加させていただきました。卒業後も、東海西部の旧石器で一文书く際には、必ず立ち返る資料群となっています。

この資料群で特に注目されるのは、日野遺跡で確認された瀬戸内技法の接合資料です。盤状剥片の作出から翼状剥片の剥離、国府型ナイフ形石器の製作まですべての工程が復元でき、この遺跡内で一連の作業が完結していることがうかがわれます。

この接合資料には、板取系珪質溶結凝灰岩という石材が用いられています。この石材の原産地は日野遺跡・寺田遺跡よ

り直線距離で30kmほど北、長良川の支流板取川中流域にある阿部山です。珪質部分は溶結凝灰岩の一部にレンズ状に入り、岩脈としては大きくなさそうです。日野遺跡・寺田遺跡近くの長良川河川敷でも転石は得られますが、数時間探して鶏卵大以下の小さなものが1〜2個拾える程度です。まとまった量を確実に得ようとすれば原産地近くまで行く必要があります。接合資料に用いられている石材は小児の頭ほどの大きさの垂円礫ですから、おそらく板取川中流域まで取りに行ったのでしょう。

板取系珪質溶結凝灰岩は、密度高く貝殻状断口の発達する良質の石器素材です。フレッシュな割れ面は光沢ある暗灰色をしています。風化すると珪質頁岩のような乳白色になります。当地域のチャート岩製石器の中では目を引く美しさです。しかし、縄文時代遺跡における当石材の利用頻度は低く、板取川流域でも剥片石器に占める割合は5%程度、板取川が長良川に合流する濃尾平野北縁辺りで3%、それより下流では1%に満たなくなります。旧石器時代資料のデータは限られますが、濃尾平野周辺では2%に満たない遺跡がほとんどです。当地域では、その良質さにもかかわらず、旧石器時代縄文時代を通じてマイナーな石材であったといえます。

しかし、その中であって、日野遺跡では剥片石器全体に占める割合が13.1%、「瀬戸内系ブロック」とされる石器群に限れば19.2%と際立って高い頻度で利用されています。国府型ナイフ形石器の素材としてこの石材を選択し、わざわざ原石を取りに行き、日野遺跡まで持ち込んで石器を製作したようです。(ちなみに、隣の寺田遺跡では6.3%です。)

このマイナーで美しい石材を選択し、取りに行ったのは当地域の石材環境に精通した者でしょう。しかし、この石材を用いて行われた石器製作は、当地域の石器製作伝統の中ではとらえられない瀬戸内技法一連のシステム(国府型ナイフ形石器を念頭においた定型的な素材剥片の剥離、素材剥片の作出を意図した石核素材の準備)が存在することから、瀬戸内地域の技術的性向を備えた者によると思われます。山形県越中山K遺跡や埼玉県殿山遺跡などの瀬戸内技法関連資料にも、その地域ではマイナーであるが美しい石材が用いられているようです。その地域の石材に精通した者が特別な石材を準備し、異なる石器技術を有する者が特別な方法で石器を製作する。ここに、異文化集団の邂逅の姿が映し出されているのかもしれません。

(参考文献) 吉田英敏編1987『寺田・日野1』岐阜市教育委員会
※今回のマイ・フェイバレット・サイトは小林康男さんです。



▲岐阜市日野遺跡・寺田遺跡位置図(大正9年地形図に加筆)

考古学者の書棚

「鎮めとまじないの考古学(下) -珍壇具からみる古代-」

森郁夫・藪中五百樹 著／雄山閣(2013)

高橋 香

「森先生、亡くならはったで。」

そんな内容だったかと思う。突然の1本の電話。いただいた電話の内容が一瞬理解できず、電話の主は何を言っている

のだろう、とわからなかった。心落ち着かせ、冷静に聞いてみるとどうやら突然の訃報の知らせの内容だった。今の今まで、元気でいると信じて疑わなかった森郁夫先生が、どうやら3月

ぐらいから体調を崩され、入院していた事をその時初めて知らされた。

亡くなられてしばらくたったある日、手元に1冊の書籍が送られてきた。闘病生活に入られた森先生のその時に校正されていたといわれる書籍のうちの1冊であった。先生が何を伝えたかったのか少しでも理解したくて、気がつくと手に取り目を通していた。ここでは、そんな思いのある書籍を紹介してみたい。

本書の内容は、

はじめに

第一章 地鎮・鎮壇

第二章 神社の成立

第三章 生と死の鎮め

第四章 自然災害と鎮め

第五章 水と火の鎮め

第六章 末法思想への備え

おわりに

という構成である。

第一章では、「地鎮」とはいかなる行為であるか、についてふれている。どのような規模の建物であっても、その地にいる神の領域を侵す事を詫び、その加護によって工事の無事と未来永劫を祈って神を鎮める儀式・地鎮祭が行われる。一般的に大地を切り開き平坦にする際に「地鎮祭」が行われ、建物を建てる為に行われるのが「鎮壇」というが、考古学的に出土状況のみをみた上では両者は区別する事は困難であり、「地鎮・鎮壇」と併記している。そうした行為が古来より行われており、特に古代寺院等からは地鎮遺構を見る機会が多い。現存する寺院の中で、古来よりこの地鎮め行為をおこなってきた回数が多いのは興福寺で、遺構としては奈良時代2ヶ所、平安時代2ヶ所、鎌倉時代1ヶ所、江戸時代1ヶ所、明治時代1ヶ所、大正時代1ヶ所と各時代において行われ、それぞれ遺構として確認されている。興福寺は、建物が幾度となく焼失・再建を繰り返しているが、創建期の地鎮・鎮壇具が手つかずのまま埋納された状態が発掘調査で明らかにされており、この段階のものが残っていた事は奇跡的である、と著者は述べている。

第二章では、神社の成立について触れている。昨今、伊勢神宮や出雲大社など神社ブームであるが、神殿の成立についてはまだ謎が多い。「神社」の記載については『日本書記』の崇神天皇六年の記事がその初源とされているが、斉明天皇5(659)年に「出雲国造に命せて、神の宮を脩葺わしむ」とあり、社殿にまつられている神にふさわしいものをつくる、といった意味合いがある事から神社建築の造営があった事を伺わせる記事として紹介されている。神社の構造物については、弥生時代から見られる掘立柱建物址へとそのルーツをたどる事ができる。棟持ち柱建物跡は、弥生時代の大阪府池上曽根遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡が、総柱建物址は群馬県鳥羽遺跡の建物址が著名であり、両建物址の形態は、神社建築の基礎となった構造物であった事は間違いなさそう。

第三章では生と死の鎮めという内容で、胞衣の埋葬や火葬について書かれている。人間の誕生とともに生まれた胞衣は人間の成長を願って埋めるもので、近・現代まで行われていた行為である。子の成長を祈る親の姿が古代から行われていた事を、発掘調査事例をあげて紹介している。

第四・五章では自然災害と鎮め、水と火の鎮めについてふれており、自然現象といかに古代の人々が格闘してきたかが読み取れる内容である。『続日本紀』等をみていると、頻繁に雨乞い等呪いについての記載が多い。その祈りの際に使用する道具として「絵馬」や「人面土器」等を形代として用いる。絵馬等の木製品を使用する呪いについては「律令祭祀」として認識される。この祭祀形態は地方にも伝播していくが、静岡県伊場遺跡や神奈川県七堂伽藍址の河道址等、郡衙関連の施設から出土する事が多い。第2節で地震についてかかれている。3年前の東日本大震災が起こった年に、貞観地震と同規模の地震で遺跡の発掘調査等から津波の範囲が明らかになっていた事等が話題になった。自然災害がおきた時、人はあまりにも無力でなすべがない、という事を思い知らされる。それでも「祈る」事で古代の人々は心の安穩を探していたのだろう。

最後章では末法思想の備えについて古代の人々がどうしてきたのかについてふれている。「末法思想」とは、自力では迷いや苦しみにから逃れる事ができない末法の時代がこれからくる、では私たちは何に救いを求めればよいのかと考えた時、阿弥陀如来と弥勒菩薩をその信仰の対象としよう、という思想で、平安時代半ば頃から流行する。末法の世に向かう世界での埋葬形態、つまり経塚であったり瓦経だったりなのだが、これらについてふれ、「おわりに」へと続く。

「おわりに」は、書籍を手にする事が叶わなかった森先生に代わり、著書とは別の方が執筆している。その中で森先生が「日本人が古来大切にしてきた先人たちの平穩を祈る思い、そして様々な悪鬼を祓い、神に祈った純粋な日本人の精神性を考古学に鑑みて記されました。」とある。平穩を祈る思いは古来より持ち続けられており、いろいろな面でそれを感じる事があるだろう。「祈り」という行為は、何らかの目的をもっている。出土した遺構・遺物から、こうした「祈り」を読み取り、可能な限り代弁していく事が、私たち考古学に携わる人間にとつての責務なのであろう。

なお、本書籍は上下セットになっており、関心のある方は「上」も是非目を通していただければと思う。

アルカ通信 No.122

発行日 2013年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp